


まさかの乳がん 右胸の思い出と悲しみ わたしに合った乳房 再建は

有料記事

後藤一也 2022年9月24日 9時00分



乳房を再建した上原笑理子さん=本人提供 



年間9万人以上が新たに診断され、女性のがんで最も多い乳がん。手術で失った乳房を自分の組織や人工物を使って取り戻す乳房再建は、見た目だけでなく、治療後の患者の生活の質の向上にも密接につながっている。手術の時期や方法も患者が選択できるようになってきた。(後藤一也)

右胸に感じた違和感

宮崎県の上原笑理子さん(63)は2019年10月、着替えをしていて、右胸に小さなものがひっかかった気がした。

「いつもはないのに……。乳がんじゃないといいんだけど」

県内の病院で初期の乳がんと診断され、医師から「右胸を全部とりましょう」と言われた。ショックだったが、「乳房再建という方法もありますよ」と提案され、「作ればいいか」と前向きになれた。

その病院には形成外科の医師が常勤していなかったため、鹿児島市の相良病院で手術することに。20年1月、同病院形成外科の野元清子部長から再建手術の説明を受けた。ジムや温泉が好きで、体の他の部位に目立つ傷を付けたくなかった。自分の背中や腹部の脂肪・筋肉の組織を使うのではなく、シリコン製の人工乳房を使って再建する方法を選んだ。

野元部長からは、右の乳房を切除した後、皮膚を伸ばす組織拡張器を入れるところまでを1回の手術で行う同時再建を勧められた。人工乳房を入れる手術は改めて受けることになった。

20年2月、最初の手術を実施。乳房再建後、乳輪や乳頭をつくる際に使う軟骨も採取した。

術後、右胸は乳頭が無くなり、平らになった。かつて息子2人を母乳で育てたときの思いがこみ上げ、悲しくなった。

切除したがん組織を調べたら、がんが少し広がっていることがわかり、抗がん剤 や分子標的薬を使った治療をすることになった。抗がん剤投与後は 免疫力 が一時的に落ちて、感染症のリスクが高まる。埋め込んだシリコーンから感染が起きれば、長引くこともある。採血データを確認しながら、その後のスケジュールを立てた。

半年間の抗がん剤治療を終えた後、シリコーン製の人工乳房を右胸に入れる手術をした。ふくらみは戻ったが、シートベルトをつけるときや、寝返りを打つときに少しごろっとした違和感が残った。

21年3月には自身の軟骨を芯に乳頭を再建した。「乳首が帰ってきた」とうれしかった。乳輪はタトゥーで色づけをした。その年の秋には乳がんの手術後、初めて温泉に行った。

「元の生活に戻れて本当にうれしい」

再建方法ごとに利点と欠点

乳房再建の方法は、自分の背中や腹部の脂肪・筋肉組織を使う方法と、シリコーン製の人工乳房を使う方法（インプラント）があり、それぞれ利点と欠点がある。

自分の組織を使うと、基本的には「一生モノ」になる。やわらかさや動きもインプラントより自然になる。また、切除していない方の乳房の形と近いものができる。

だが、自身の組織を採取する際に腹部や背中など乳房以外にも傷が付く、手術時間も入院期間も長くなる。術後しばらくは力仕事を避けたほうが好ましいなど、仕事によっては調整が必要になる。

インプラントは、乳房以外の部位に傷が付かないことや、手術時間や入院期間も短くて済むという利点がある。

一方、10年使うと破損のリスクが少しずつ高まる。定期的に通院し、入れた人工物に異常がないか経過を見て、破損が明らかな場合は交換を検討する。また、切除していない方の乳房が加齢で下垂してくると、インプラントとのバランスが合わなくなることもある。

インプラントをめぐっては19年、当時 公的医療保険 で唯一認められていた製品で、「乳房インプラント関連未分化大細胞型リンパ腫」というまれな 合併症 が起きることが問題となり、製品が自主回収された。原因不明で、国内でも4例が報告された。

日本乳房オンコプラスチックサージャリー学会などは「このリンパ腫の症状としては、インプラント周囲に液体がたまって胸が大きく腫れる、インプラント周囲のしこりなどがある」としている。症状がなければ予防的に摘出する必要はないとしている。

現在は、自主回収となった製品とは別の3種類のインプラントが公的医療保険の適用になっている。

乳房をいつ再建するかも重要な問題だ。

乳房を切除する手術と同時に自分の組織を使って再建することもできる。手術時間が長くなるが、手術の回数は少なくて済む。

ただ、患者の中には、検診で乳がんの疑いを指摘され、乳房再建のことまで考える精神的余裕がない状態で乳房を切除する手術に臨む人も多い。切除後、治療が落ち着いた段階で再建方法についてじっくり考えて手術をするという選択肢もある。

情報格差が深刻

NPO法人「エンパワリングブレストキャンサー」(東京都)は、乳房再建についてのアンケートを毎年実施している。

21年度の調査によると、乳房を再建した人の45%が「精神面の不安定さがなくなった」、28%が「おしゃれができる」と回答した。他にも「病気のことでばかり考えずに済む」といった回答もあった。

一方、再建手術をして良くなかったことを尋ねると、34%が「胸の形や左右バランスが悪い」と答えた。「痛い」「今後の入れ替えの問題に不安」といった声もあった。

また、手術の入院のために長期間仕事を休みにくい、地方では近くに再建手術ができる病院がない、といったことも課題として見えてきた。

年間400～500件の乳房再建術を手がけるがん研有明病院(東京都 江東区)の矢野智之・形成外科部長は「働いているか、小さい子はいるかなど、一人ひとりの生活背景を聞き、通院の負担や入院期間を考えて選択することが大切」と話す。

日本ではこの10年でようやく乳房再建が話題となり、診断と同時に提案されるようになってきた。だが、再建に関する情報提供は、地域差が大きいとされる。正確なデータはないが、乳房を切除した人の2割ほどしか再建をしていないと考えられている。

矢野さんは「乳房再建は『見た目だけ』と言われることもあるが、体のバランスや下着の合わせにくさなど、機能面への影響も大きい。日々の生活に直結している」と話す。